

母親のアタッチメントスタイルについての研究

—混合型—

津田 朗子 木村留美子 南家貴美代* 木村 礼

KEY WORDS

Attachment in the childhood, Internal working model, Attachment style, Mixed

はじめに

育児放棄や虐待、育児不安などさまざまな子育ての問題が報じられる中で、5年前より行っている育児相談では、子育てを行っている今、母親自身が過去に養育されてきた自分自身の親との関係に直面し、我が子とどのように向き合えばよいのか戸惑いを感じている人たちからの相談が増えてきている。

親と子の「こころの絆」であるアタッチメント(愛着)は、子どもが親あるいはそれに代わる特定の他者から日常的に行われてきた世話によってアタッチメントのタイプが決定する¹⁻⁴⁾。乳幼児のアタッチメントについては、新奇場面法(Strange Situation Procedure: SS法)⁵⁾の開発により急速に研究が進み、タイプの分類が容易になった。この研究を通して、子どものアタッチメントスタイルは以下の3つのタイプに分類された。実験場面において、乳児は母親との分離を突然体験し深く悲しむが、母親との再会によりすぐに落ち着きを取り戻すタイプを「安定型」とした。同様に乳児が母親との突然の分離を体験し混乱するが、その後母親と再会した時にも混乱した状態が長く続くタイプを「不安定型」とした。そして乳児が母親との突然の分離や再会に関して関心を示さないタイプを「回避型」とした。これは、アタッチメント行動と呼ばれ、子どもが親あるいはそれに代わる重要他者から受ける日常的な関わりを通して、他者に対してのイメージと自己に対してのイメージを自分自身の中に内在化させた結果であり、これを内的作業モデル(Internal Working Model: IWM)として概念化した^{1, 2)}。

IWMはAdult Attachmentとも呼ばれ、幼少期のアタッチメントを基盤にして他者に対して抱いてい

るアタッチメントとして現在多くの研究が行われてきている^{6, 7)}。これらの研究をもとに、母親のIWMと子どもへの養育態度の関係⁸⁻¹¹⁾や親自身が養育されてきた経験は自分自身の育児行動に影響を及ぼすなどのアタッチメントの世代間連鎖¹²⁾が指摘されており、現代社会の子育ての問題の一つとなっている。また、IWMは、その後の新たな支持的関係によっても自己についてのIWMやアタッチメント対象に対するIWMが再構築されるとの報告もある^{13, 14)}。

そこで、本研究では、育児支援に役立てることを目的に、現在子育て中の母親のアタッチメント(愛着)の調査を行い、個人の特徴をより詳細に検討することを試みたので報告する。

本研究では、愛着理論¹⁻³⁾の中で論じられてきた典型的な「安定型」「不安定型」「回避型」の3つのアタッチメントスタイルに加えて、「不安定回避型」「混合型」「判定不能型」の3つのタイプが新たに分類された¹⁵⁻¹⁷⁾が、今回はこの中の「混合型」について報告を行う。「混合型」は「安定型」と「不安定型」、「安定型」と「回避型」、および「安定型」「不安定型」「回避型」の3つのタイプが合わさったタイプである。

調査対象および方法

1. 対 象

対象は、全国の82ヵ所の保育園に通う園児の母親6135名(有効回答率98.6%)である。母親の平均年齢は32.7±4.6歳、第一子出産年齢は27.0±3.9歳、子どもの人数は平均2人であった。調査時期は平成13年9月~平成14年2月である。

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University

* School of Health Sciences, Kumamoto University

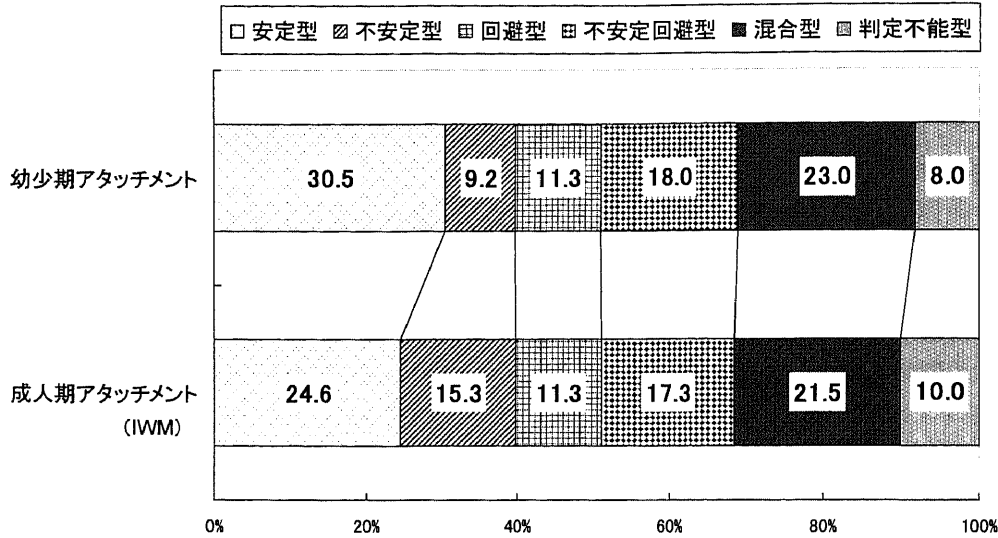


図1 アタッチメントスタイルの割合

2. 方 法

調査は、まず保育園の園長に研究の目的や方法を説明した上で保護者への協力を依頼した。保護者に対しては、調査への協力は自由であり、協力の有無により園児及び保護者への不利益は生じないことや回答者のプライバシーの保護についての説明を行った。

調査内容は、幼少期のアタッチメントと成人期のアタッチメントである。幼少期のアタッチメントは Ainsworth⁵⁾ の SS 法を参考に青柳ら¹⁰⁾ が作成した尺度であり、子ども時代の親との関係を想起法により記入するものである。項目には5段階の評定尺度が設けられており、得点化できる。成人期のアタッチメントは詫間ら¹⁹⁾ による「成人用愛着スタイル尺度」を用いた。本尺度は現在親自身が他者に対して形成しているアタッチメントである。この項目にも5段階の評定尺度が設けられており得点化できる。本調査を実施する前に、石川県内の保育園に子どもを通わせている母親554名を対象に予備調査を行い項目を検討し、幼少期アタッチメント、IWMの各尺度の検討を行いその有効性を確認し、本調査では全項目を用いて実施した。

3. 分 析

統計解析ソフト SPSS10.0J を用い、分析を行った。割合比較では χ^2 検定を行った。

結 果

1. アタッチメントスタイルの割合

幼少期アタッチメントにおいても、IWM におい

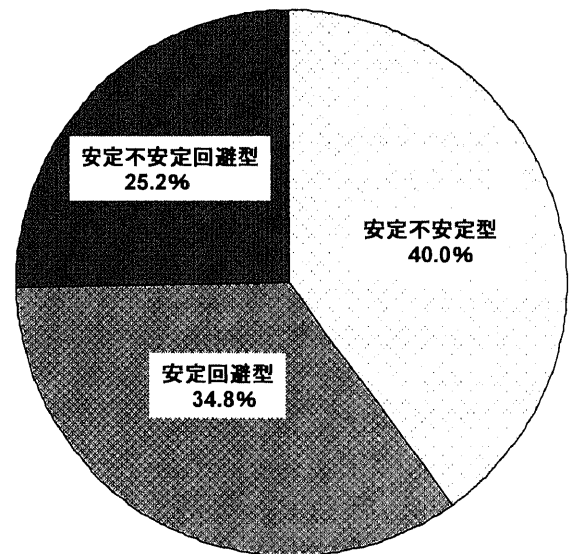


図2 IWM「混合型」に含まれる3タイプの割合

ても同様の6タイプのアタッチメントスタイルが抽出された。幼少期アタッチメントの割合は、「安定型」が30.5%、「混合型」が23.0%、「不安定回避型」が18.0%、「回避型」が11.3%、「不安定型」が9.2%、「判定不能型」が8.0%であった(図1)。

IWMは「安定型」が24.6%、「混合型」が21.5%、「不安定回避型」が17.3%、「不安定型」が15.3%、「回避型」が11.3%、「判定不能型」が10.0%であった(図1)。

2. IWM「混合型」について

IWM「混合型」は、愛着理論^{1-4, 8, 9)}による「安定型」、「不安定型」、「回避型」が混在したタイプで

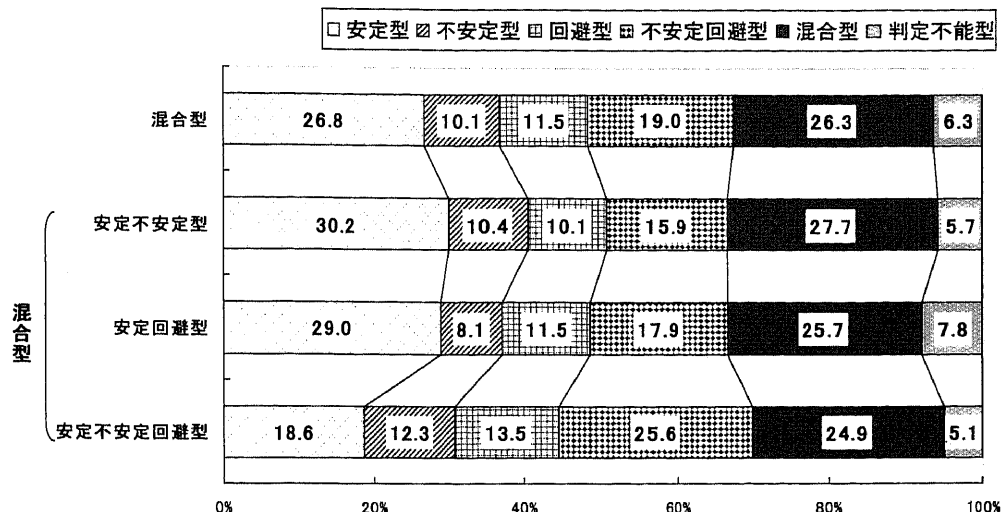


図3 IWM「混合型」とそれを構成する3タイプの幼少期アタッチメント (p<0.001)

ある。その組み合わせによって3つのタイプから構成されているが、これを総称して「混合型」と命名した。その内訳は、「安定型」と「不安定型」の特徴を持つ『安定不安定型』が40.0%、「安定型」と「回避型」の特徴を持つ『安定回避型』が34.8%、「安定型」と「不安定型」および「回避型」の特徴を持つ『安定不安定回避型』が25.2%でいずれも「安定型」を含むタイプである(図2)。

1) IWM「混合型」を構成する3つのタイプと幼少期アタッチメントの割合

IWM「混合型」は、幼少期「安定型」が26.8%、「混合型」が26.3%、「不安定回避型」が19.0%で、「安定型」と「混合型」の割合が多かった(図3)。

IWM「混合型」を構成する『安定不安定型』『安定回避型』『安定不安定回避型』に占める幼少期アタッチメントの割合は、『安定不安定型』は「安定型」と「混合型」が約60%を占め、『安定回避型』は「安定型」と「混合型」が約55%を占めていた。『安定不安定回避型』は「不安定回避型」と「混合型」が50%を占め、「安定型」の割合は18.6%で他2つのタイプと比べて「安定型」の割合が少なかった(p<0.001)(図3)。

2) IWM「混合型」の強度について

「判定不能型」を除くアタッチメントスタイルでは、その得点から、それぞれのタイプには強さの程度が見られたため、得点の高い順に強、中、弱と3段階に分類した。IWM「混合型」の強度の割合の内訳は、強いタイプが31.6%、中等度のタイプが45.0%、弱いタイプが23.4%で、中等度の割合が最

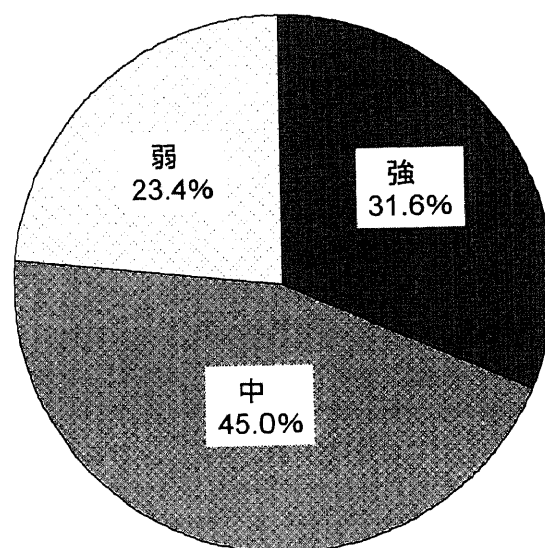
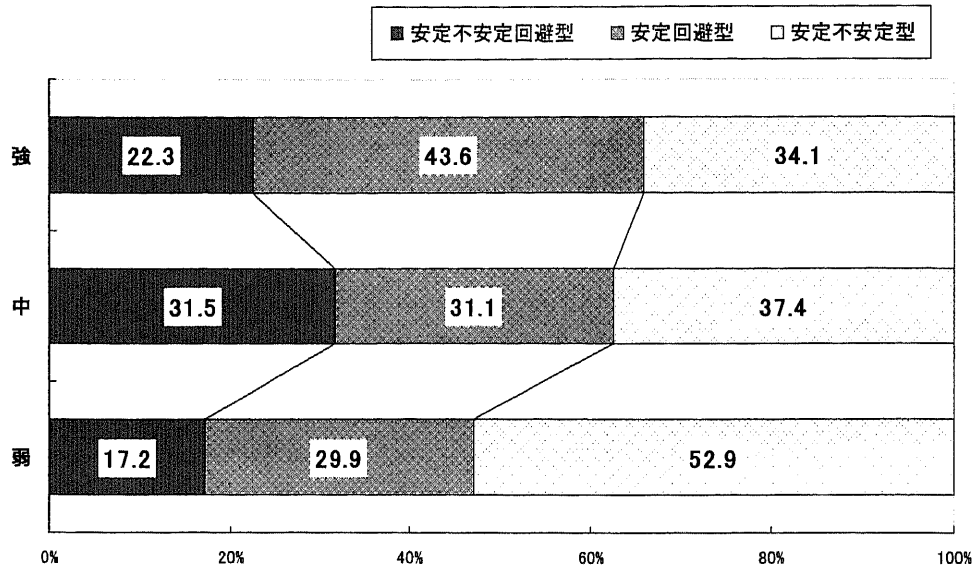


図4 IWM「混合型」のタイプの強さの割合

も高かった(図4)。また、強さの程度別に「混合型」を構成する3つのタイプが含まれる割合を比較したところ、強いタイプには『安定回避型』が最も多く43.6%、『安定不安定型』が34.1%、『安定不安定回避型』は22.3%であった。中等度のタイプは『安定不安定型』が37.4%と最も多かったが、『安定不安定回避型』は31.5%、『安定回避型』は31.1%であり、3つのタイプはほぼ等しい割合であった。弱いタイプは『安定不安定型』の占める割合が圧倒的に多く52.9%、次いで『安定回避型』が29.9%であった(図5)。

図5 IWM「混合型」の強さの程度とタイプの割合 ($p < 0.001$)

考 察

IWM「混合型」が6タイプの中で占める割合は21.5%であった。本調査で明らかになった6タイプのうち「不安定回避型」は、「不安定型」と「回避型」の特徴を持ったタイプである。「判定不能型」は「安定型」、「不安定型」、「回避型」、「不安定回避型」、「混合型」のいずれの特徴も弱くどのタイプにも分類できないタイプである。さらに「混合型」は、「安定型」を含む「不安定型」、「回避型」であり、これらのタイプはいずれも異なるタイプがひとりの中に混在して存在するタイプであり、対象の約半数は個人の中に複合したアタッチメントスタイルを持っていることが明らかとなった。このことは、従来のアタッチメント理論の3タイプだけでは個人の特徴を説明できないことを示唆したものとして意義深い。

IWM「混合型」は幼少期にも「混合型」と同じタイプのまま成人期へ移行した割合が高く、また、「安定型」の占める割合の多いことから、根底には親との良好な関係を形成しているタイプが多く含まれるものと考えられる(図3)。これに関しては、「混合型」を構成している3つのタイプからも明らかのように、3つのタイプのうち『安定不安定型』と『安定回避型』は幼少期アタッチメントの割合が類似しており、「安定型」の占める割合が多く、また「安定型」を含む「混合型」の割合も多く、根底には「安定型」のアタッチメントを持つタイプの多いことが示唆された。また、残る『安定不安定回避型』は、幼少期アタッチメントの割合が「不安定回避型」

と「混合型」、および「安定型」から構成されており、IWMに『安定不安定回避型』の占める割合は最も少ないが、まさに3つのタイプを根底に持つ「混合型」であった(図3)。

得点によるタイプの強さの割合からこれらの特徴を比較すると、IWM「混合型」は中程度の強さの割合を示すものが最も多く見られた(図4)。この割合について3タイプの占める割合を比較すると、強いタイプは『安定回避型』が多く、中程度では3つのタイプがほぼ同じ割合を示し、弱いタイプは圧倒的に『安定不安定型』が多くみられた。

このように表面に表れる人の特徴はIWM「混合型」のタイプではあるが、詳細にみると「混合型」を構成する3つのタイプのいずれかであり、どのタイプであるかによって、その特徴は多少異なる。したがって、それに伴い子育て中の母親に対する支援の方向も変化させる必要があると考える。

今回の調査からは幼少期のアタッチメントとIWMのタイプの割合が異なっており、個人の中でタイプの変化が生じていることが明らかとなった。このことは、Bowlby^{1,2)}が幼少期に形成されたアタッチメントは変化することなくその人の生涯の対人関係に影響を及ぼすと述べていることとは異なる部分を確認された。つまり、本調査結果は、人が不幸にして幼少期に親との間に良好でないアタッチメントを形成していたとしても、その後の他者との関係により人間は変化することができることを示したものとして意義深いと考える。

今後は、それぞれのタイプの特徴による相違を、家族との関係や育児観および育児不安との関連から明らかにしていきたいと考えている。

謝 辞

本研究に快くご協力いただきました保護者の方々および保育園の園長ならびに保育士の方々に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Bowlby, J : Attachment and Loss (I) Attachment. New York : Basic Books, 1969. (黒田実郎訳 : 母子関係の理論 I. 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1976.)
- 2) Bowlby, J : Attachment and Loss (II) Separation : Anxiety and anger. New York : Basic Books, 1973. (黒田実郎訳 : 母子関係の理論 II. 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1977.)
- 3) Bowlby, J : Attachment and Loss (III) Loss : Sadness and depression. New York : Basic Books, 1980. (黒田実郎訳 : 母子関係の理論 III. 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1981.)
- 4) Waters, E. : The reliability and stability of individual differences in infant-mother attachment. *Child Development*, 49 : 483-494, 1987.
- 5) Ainsworth, M.D. S, et al. : Patterns of Attachment. A Psychological-study of the strange Situation. Hillsdale, NJ : Erlbaum, 1978.
- 6) Michael, B.S., William, H.B. : Attachment in Adults : Clinical and Developmental Perspectives. 1994.
- 7) 南家貴美代 他 : 母親の幼少期アタッチメントのタイプから Internal Working Models のタイプへの移行と移行に関わる要因の検討.
第43回日本母性衛生学会抄録集, 43(3), 118, 2002.
- 8) Crowell, J.A., Frlman, S.S. : Mother's internal models of relationships and children's behavioral and developmental status : A study of mother-child interaction.
Child Development, 59 : 1273-1285, 1988.
- 9) Haft, W.L., Slade, A. : Affect attunement and maternal attachment : A pilot study. *Infant Mental Health Journal*, 10 (3) : 157-172, 1989.
- 10) 木村留美子 他 : 母親のアタッチメントのタイプと育児観, および育児不安との関連について. 第43回日本母性衛生学会抄録集, 43(3), 166, 2002.
- 11) 津田朗子 他 : 母親の Internal Working Models と子どものイメージ. 第44回日本小児保健学会講演集, 92-93, 2002.
- 12) Benit, D., Parker, K.C.H., : Stability and transmission of attachment across three generations. *Child Development*, 65 : 1444-1456, 1994.
- 13) Ricks, M.H. : The social transmission of parental BEHAVIOR : Attachment across generations. In Bretherton, I., Waters, E. (Eds.). *Growing points in attachment theory and research*, 50 : 211-227, 1985.
- 14) Main, M., Kaplan, N. : Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation.
In Bretherton, I., Waters, E. (Eds.). *Growing points in attachment theory and research*, 50 : 66-104, 1985.
- 15) 木村留美子 他 : 母親の Internal Working Model について(1)-判定不能型の特徴. 第44回日本母性衛生学会抄録集, 44(3), 194, 2003.
- 16) 竹俣由美子 他 : 母親の Internal Working Model について(2)-不安定回避型の特徴. 第44回日本母性衛生学会抄録集, 44(3), 194, 2003.
- 17) 津田朗子 他 : 母親の Internal Working Model について(3)-混合型の特徴. 第44回日本母性衛生学会抄録集, 44(3), 194, 2003.
- 18) 青柳肇 他 : アダルトアタッチメントと回想による幼少期アタッチメントとの関係. *早稲田大学人間科学研究*, 10 (1) : 7-16, 1997.
- 19) 詫間武俊 他 : 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. *東京都立大学人文学報*, 196 : 1-16, 1988.

The study on the attachment style of the mother —The type of mixed—

Tsuda Akiko, Kimura Rumiko, Nanke Kimiyo, Kimura Aya